

メリメの自由論

『タマンゴ』、黒人、奴隸制

奥田 宏子

はじめに

『タマンゴ』（一八二九年）は奴隸の反乱を描いたプロスペル・メリメ（一八〇三—一八七〇）の短編小説である。『カルメン』でジプシー（ロマ）女とバスク男、『コロンバ』でコルシカ人兄妹などを登場させてメリメはヨーロッパ内のエスニシティに関わる作品を書いたことで知られるが、『タマンゴ』ではアフリカ黒人を主要登場人物とした。

奴隸⁽¹⁾をアフリカに買い付けに行くフランス人船長の描写からこの作品は始まる。ヨーロッパ人がアフリカ黒人を新大陸へと輸送し始めてからメリメの時代までに、すでに二世紀以上の歳月が経過していた。⁽²⁾この間、大西洋を渡った奴隸の総数は概算で一〇〇万人以上とされる。これだけの歳月、これだけの人数がヨーロッパ諸国の植民地農場経営に必要な労働力を提供していたわけである。

奴隷制度はヨーロッパにとって国益に関わる政治的・経済的な問題であり、自由・平等・友愛を謳ったフランスといえども、『タマンゴ』発表当時、なおこの制度を廃止するに至っていない。⁽³⁾ メリメの国が奴隷制度を全面廃止したのは、当作品から二十年余りのもの一八四八年である。

フランスでは、またその他のヨーロッパ列強においても、十八世紀末がアフリカからの奴隷輸送の最盛期であった。西インド諸島のプランテーションで栽培される砂糖、タバコ、木綿、コーヒーなどの需要が増大する時期と一致する。⁽⁴⁾ 庶民の消費生活の伸びや産業振興政策は植民地からの原料をそれまでも増して必要とするようになっていた。

十八世紀末とはフランスにおいては大革命期である。自由をモットーとして掲げたのだが、他方で多数のアフリカ黒人の自由を拘束する奴隷問題の解決は先延ばし状態だった。⁽⁵⁾ だが革命の炎は海を渡って西インド諸島の仏領植民地サン＝ドマングに届き、そこで奴隷反乱が勃発、やがて独立へと進展した（一八〇四年、ハイチ共和国誕生）。奴隷制度に長らく繁栄を依存していたヨーロッパ列強が揃って衝撃を受けた大事件であった。

『タマンゴ』は、こうした背景のもと、西インド諸島マルチニクヘアフリカから奴隷を輸送するいわゆる奴隷船で起きた反乱を描いている。⁽⁶⁾ サン＝ドマングにおける反乱と独立を機にパリの知識人の間においても奴隷問題の是非が他人事ではなくなっていた時期の作品である。⁽⁷⁾

『タマンゴ』ではフランス人船長ルドウの帆船が、奴隷船出港地として名高かったナントを出てアフリカに向かうが、航海の間、船長はイギリスの巡洋艦の監視を恐れている。奴隷交易の廃止がウィーン会議（一八一四―一五年）で決められ、奴隷輸送は原則的に不法だったのだ。こうした危険にもかかわらず、今なお船長が奴

隷輸送をやめないのは、この商売が大金の入手を約束したからだ。ナント出港の際、ルドウの船は奴隷の輸送に必要な足枷や鎖などを大量に入れた大きな箱を六つも積み込んでいたのだが、港務官はこれを見逃し、首尾よく出港した。交易廃止にもかかわらず、多くの奴隷船が、実際には、なお大西洋を航行していた。⁽⁸⁾

発覚されずにアフリカまで無事に航海したフランス人船長は、白人の船の入港を待ち構えていた現地奴隷商から奴隷を購入し、そそくさと次の目的地である西インド諸島に向かった。この船「希望号」に乗っているのは、船長の他に奴隷の警備員を兼ねる相当数の水夫、そして船が満杯になるまで——実際は満杯をはるかに超えて——中甲板に鎖に繋がれて詰め込まれた二百人近い黒人奴隷たちだ。

アフリカの沿岸を出帆してほどなく、昨日、船長と取引した現地奴隷商がカヌーを漕いで血相を変えて、まだ沿岸をそう遠くまで離れていないフランス船を追いかけてくるではないか。購入済みの奴隷たちはすでに船倉に「押し込んで」あるから、白人船長の輸送船にもう用はないはずのこの現地人——これが作品の主人公タマンゴである——は一体、何を思ってそんなに慌ててフランス船を追いかけて来たのか。

白人船長とアフリカの黒人奴隷商をめぐるこの物語は、白人と黒人、ヨーロッパとアフリカ、ヨーロッパと新大陸などの関係を通して、奴隷と奴隷輸送の諸問題を語っていく。奴隷問題を語るとは、究極のところ、自由を奪われるとはどういうことを語ることである。作者はこの作品で人間にとっての自由とその剝奪をどのように語っていくのか。本稿は『タマンゴ』をメリメの自由論として解読する試みである。

タマンゴの生業

アフリカ黑人タマンゴの生業は、黒人を「仕入れて」白人に奴隷として売りさばくことだった。フランスから奴隷の買い付けにやってきたルドゥ船長の船が西アフリカのこの地の港に着いて錨をおろすと、土地の奴隷商人たちが先を争って船に寄ってきた。その中に「戦士」タマンゴもいた。船が入港したので、彼は「今しも数多の奴隷を引き具して海岸へやってきた」(三四一)のだった。⁽¹¹⁾

タマンゴは他の奴隷商人よりも奴隷を安値で売ることでは知られていた。「自分の取引する品物が市場に品薄になるや否や迅速に補給する力と手段」(三四一)を持つ有能な奴隷商人であった。「品物」とは奴隷のこと、それを「補給する力」とはアフリカ各地から奴隷を集めてくる手腕のことに他ならない。

当時、ヨーロッパの奴隷輸送船はまずアフリカに向かい、そこで奴隷を買い入れて彼らを積み込むと大西洋を新大陸に向かった(奴隷を売ると今度は新大陸の産物を積んでヨーロッパに帰ってくる)。これが大西洋三角交易である。ヨーロッパ諸国の植民地経営はこうして輸送される、アフリカからの労働力に依存して成り立っていた。

タマンゴのような現地の「奴隷売り」は、白人「奴隷買い」の需要に合わせて黒人をアフリカ各地から入荷・集積しておく。⁽¹²⁾ タマンゴを紹介する最初の言葉が「戦士」であるのは、彼の入荷すなわち奴隷の獲得は広義の「戦い」を、畢竟、意味したからだ。⁽¹³⁾ この男はまた作品の山場で「自由」のために壮烈な戦闘を白人に挑

むことになる。「戦士」という言葉の意味が、その時、また増幅されることになるだろう。

買入れに来たヨーロッパ人にとって、商品の「品薄」はどう見ても不都合である。すぐに奴隷を補給できる能力と腕力をもつタマンゴのような現地人は、したがって白人にとって便利この上ない存在だ。奴隷船の入港を目ざとく見つけて港に寄って来た数多の現地奴隷商の中から、フランス人船長ルドゥがすぐタマンゴに目をつけて彼を取引相手に選んだのは、さすがに老練の船長だけのことはある。⁽¹⁴⁾そしてこれが主要登場人物二人の出会いとなった。

現地商人タマンゴの藁小屋をルドゥ船長が訪ねて初対面の挨拶がすみ、フランスからの贈り物の進呈に続いてブランドーが酌みかわされた。二人の出会いの場面にメリメはこれから語る物語を方向づける数々の指標を埋め込んでいる。これらは作品理解の鍵となるべく戦略的に置かれたものであるから、早速、見て行こう。

まず、ルドゥ船長が訪ねた藁小屋にタマンゴが「二人の妻」と住んでいた点。この中の一人をのちにタマンゴは（不覚にも）手放すことになり、これが理由でタマンゴの人生は狂い、物語の歯車も大きく回転することになる。一夫一婦制のヨーロッパ人読者に「二人妻」の存在は、一瞬、意外だったろうが、そこはアフリカの話である。一夫多妻がこの地の習俗の一部であるぐらいのことは読者も心得ていたに違いない。だが、うっかり読み過ぎしかねないこの場面、作者が早々に妻に言及しているのは、妻が今後の筋の展開に大きく関わることになるからである。

船長がフランスから持参した贈り物をタマンゴに贈呈する場面、これも注意を引く。⁽¹⁵⁾その贈り物とは「ナポレオンの肖像を浮き彫りにした、銅製のみごとな梨型の火薬入れ」（三四一）だったが、作品内のこととなれ

ばどんな小さなことにも目配りを怠らないメリメのことだから、この品物を無頓着に選んではいけないはずだ。フランスは大革命時に植民地の奴隷制度を一旦廃止した経緯があるが、それを復活したのがナポレオンだった。そのナポレオンの肖像がついた贈り物とは、やはり意味深長と言わざるを得ない。

二百年以上にわたって植民地に不可欠な労働力を本国から供給せず、もしくは供給できず、アフリカ黒人にそれを求めてきたヨーロッパ。国益という大義名分のもとで維持してきた奴隷制度。フランスにおいても長く王の名のもとで強硬に正当化され、「奴隷制度の存在そのものは、いわば当然のこととして疑問をさしはさまれることはなかった」⁽¹⁶⁾。

「われらが植民地の開発に黒人は必要であることからして、その交易を慈悲と人類愛に反する行為であるかのごとく非難するのは国家にたいして反逆の罪を犯すのに等しい。奴隷交易には罪はなく、適法である」(小川八一)というのが奴隷制擁護の論法であった。

「慈悲と人類愛に反する行為であるかのごとく非難するのは」とあること自体が図らずも非難の存在を証明するが、奴隷の暴力的捕獲、鎖に繋いで拘束した上での奴隷船による輸送、着いた植民地での隷属、想像を遙かに越える苛酷な労働など、どれを取ってもアフリカ黒人の人権が蹂躪されていたことは明らかであった。その奴隷制度がフランス大革命時の一七九四年に一旦廃止に持ち込まれたところ、ナポレオンが一八〇二年にこれを復活させた。

ところでこの贈り物は「しかるべき謝辞と共に納められた」(三四一)。タマンゴは抵抗なくこれを受け入れた、いや喜んだという。船長の意図も、この贈り物を「タマンゴを上機嫌にするために……」(三四一) 贈った

と書かれている。アフリカのこの地で、タマンゴがかの有名なナポレオンと彼の業績をどの程度知っていたかは定かではない。ナポレオンと奴隷制度との関係について何も知ることなく、「銅製のみごとな犁型」をタマンゴが謝辞とともに神妙に受け取ったのなら、船長はそれを見越してからかい半分にこれを贈り、初対面一本とったのである。

だがメリメは巧妙な作家だ。タマンゴの謝意に別の意味を含めたとしても驚くに当たらない。というのも彼は確かにアフリカ人だが、同胞を奴隷として売るのが生業だ。いわば、ある意味、アフリカとアフリカ人を裏切っていた。この立場から見ると、奴隷制度の存続は個人的に彼が望むところだ。それなら船長は、それを知ったうえでタマンゴの今後の商売繁盛を祈願して奴隷制度復活者の肖像を贈ったようにも見えてくる。ついながら奴隷制度の存続を祝うことにかけては、奴隷輸送で儲けている船長もまったくご同慶の至りなのである。

ナポレオンの肖像を浮き彫りにした贈り物は、メリメが作品の早期に仕掛けた一種のリトマス試験紙である。これへの異なる反応から、当作品の二人の主人公、つまりアフリカ人主人公とフランス人主人公が本当のところ何者であり、何を考えているか、一つ以上の可能性と選択肢が読者に呈示されているのである。

この贈り物が「火薬入れ」、つまり「戦い」の道具だという点も重要だ。「戦士」タマンゴにとって、以下に述べるような諸事情から、「火薬入れ」は「仕事」に欠かせない道具であった。船長もそのことは当然に承知していただろう。

奴隷を直接にアフリカ各地で獲得するのは、直接購入として安くつくメリットはあり、これを実行したヨ―

ロップ人もいないわけではなかったが、奴隷の「入荷」はしばしば内陸部に分け入ることを意味し、ヨーロッパ人には方法論としてもアクセスにおいても概ね困難であった。そこでタマンゴのような現地人の代行者が活躍した。

アフリカにおける奴隷獲得の典型例は、ある集団に戦争を仕掛けて捕虜をとることだった。戦争に負けた相手を入手するとはいっても、奴隷の捕獲は必然的に強制連行を伴った。タマンゴが捕虜を「仕入れる」とは、人間を「取る」ことを意味したし、また捕獲した奴隷を沿岸部へと移送する場合には、途上でしばしば鞭がふるわれ、逃亡を試みる者にたいしては戦闘姿勢で臨んだ。タマンゴが「戦士」という語で紹介されている背景に、現地奴隷商の仕事の本質的な面が言い表されている。

ルドゥ船長個人からタマンゴ個人への贈り物という枠を越えて、この「火薬入れ」をフランスからアフリカへのシンボリックな贈り物と見ると、この贈呈の含蓄はさらに深まる。フランスは、この時期、西アフリカ沿岸部で奴隷を買い付けるに留まらず、内陸部の豊富な資源―金、象牙、ゴムなど、そしてまた北アフリカにも帝⁽¹⁷⁾国主義的な目を向けていた。

アフリカ側からこれを見ると、植民地進出を試みようとする白人への対策、そしていざという時の戦闘準備の強化を迫られる立場に立たされていたということだ。⁽¹⁸⁾ 絶え間ない部族間・小王国間の内部抗争のため、またとくに白人の進攻に備えて、アフリカが必要なのは「火薬入れ」をシンボルとする武器であった。

こうして見ると「梨型の火薬入れ」の意味は、ナポレオンが浮き彫りにされているという側面の他に、奴隷仕入れ人として活躍する戦闘的タマンゴに不可欠な道具という実用的な意味も加わって喜ばれたと読み直せそ

うだ。そして対フランスという点で、アフリカへのこの贈り物は一種の警告とも取れる。戦闘シンボルとしてのこの贈り物、誰が何のために使うのか。一つ以上の可能性と選択肢を作者は再度、読者に呈示している。

船長とタマンゴの出会いの場面に作品の今後の展開を予見する謎かけが埋め込まれていることを指摘し、その一端を見てきた。こうした謎かけは短編としてのこの作品に緊張感を付与し、また同時に作品の世界をふくらませるのに役立っている。物語やイメージの縦糸横糸が前後左右に緊密に撚り合わされて、引き締まった効果が生み出される。二六歳、若いメリメの頭脳は冴えきっていた。

もう一つ、重要な縦糸を例として引いておこう。船長がタマンゴの藁小屋を初めて訪問した時の一場面。ベテラン白人船長は取引を前に、黙って現地奴隷商を見据えていた。見据えられたタマンゴのほうは、明らかにヨーロッパ人からもらったらしい古着の軍服―その服には金モールの残りがぶらさがっていた―をぎこちなく身につけて、緊張気味に直立不動で船長の前に立っていた。ルドゥ船長がこの時、考えていたことは何だったか。

ルドゥは、その道の通として彼（タマンゴ）を吟味した後、一等運転士を顧みて言った。「こりゃ君、病気になるはず損傷なしと来りゃ、マルチニックで安く見積もっても千エキュには売れるしろものだけ」（三四一）。出会ったばかりの目の前の奴隷商に、船長はなんと値段をつけていたのだ。れっきとした商売相手であるのだが、彼にすでに「奴隷」を見ている。値踏みまでしている。

この場面はルドゥ船長の頭の中を映しだしていると同時に、プロットの予見ともなっている。タマンゴをこのあと船長は、本当に奴隷にしてしまうからだ。白人船長には「奴隷売り」も「奴隷」も同じこと、要するに

黒人は奴隷、支配の対象、売買の対象、ということだ。

この場面にはルドウの差別意識が鮮明に出ているが、例えば二百年以上にわたって黒人を自分たちのための使い捨て労働力としてきた当時のヨーロッパ人の、これが平均的黒人観だったと言えそうだ。値踏みの件は、あとでタマンゴを奴隷にする時、再度、船長がこの値段をはっきり口にする。奴隷制度下の白人にとって、「いくらで売れるか」が黒人を見る時のすべてだった。

タマンゴの失敗

どんな事情でタマンゴは奴隷になったのか。発端は彼が「二人妻」の一人を船長に「あげてしまった」ことにあった。泥酔中のことで、翌朝、酔いが覚めて自らしかしたことを後悔し、出港したばかりのルドウの帆船にカヌーで慌てて駆けつけるものの、妻を取り返すことができないばかりか、逆に船上で武器を取りあげられ、取り押さえられ、鎖に繋がれたのだ。

妻を取り戻すべくフランス船に辿りついたこのアフリカ人は、船長に頭を下げ、必死に懇願し、滝のような涙を流し、「愛するエイシエの名を呼びながら甲板の上を駆け回った」(三四四)が、船長は高笑いして、「くれちまったものは返らねえよ」と背を向けた。

両者の初対面時に登場した、先に引用した一等運転士が、ここで再登場、船長に耳打ちする。「この丈夫そうな畜生をつかまえちゃどうです？」(三四四)。船長ももうとづくに同じことを考えていた。「タマンゴは大

丈夫千エキュに売れる」(三四四)とここで彼が即答できるのは、先だつて値踏みが済んでいたからだ。

妻を差し出したことがタマンゴのそもそもの失敗だった。このあたりの事情を見るために船長とタマンゴの当初の取引に少し話を戻さなければならない。例の贈り物の授受のあと、二人はブランデーの瓶をもって小屋を出て、木陰に腰をおろす。タマンゴの合図で、売るために取り揃えていた「商品」の奴隷たちが、長い隊を作つて二人の前に現れた。

船長の前に一列に並んだ黒人たちは、「からだは疲労と恐怖のために前にかがみ、六尺あまりの長い熊手で一人一人首を押さえられて」(三四一)いた。ルドウはひとわたり彼らを見廻して「質の悪さ」にケチをつけたから、「最も屈強な最も立派な黒奴数名の最初の選抜を行った」(三四二)。ここから先はベテラン商人二人の駆け引きの場となる。一方は何とか底値で買いたいし、他方は何とか高値で売りたいのであるから、商談は簡単にはまとまらない。ルドウは値引きを求めて粘り、タマンゴも容易には屈しない。一旦は商談が壊れそうになったほどだが、仕切り直しをして交渉を再開、二人は怒鳴りあい、どんどんブランデーの瓶は空になった。タマンゴが酔いつぶれたころ、売買契約が成立した。フランス側が「安物の綿布、火薬、火打ち石各々若干、ブランデー三樽、ろくすっぽ修繕していない小銃五十挺」(三四二)を提供し、アフリカ側は百六十人の奴隷を交換に引き渡すことになった。

この百六十人がフランス人水夫らに引き渡されると、「大急ぎで奴隷の首から木製の熊手を取り外し、鉄製の首かせと足かせをはめてやった」(三四二)。メリメはここで鉄製の拘束具に関してコメントを挟み、これは「いみじくもヨーロッパ文明の優越を示していた」(同)と述べている。木製の素朴な熊手が象徴するアフリカ、

鉄製の頑丈な首かせが象徴するヨーロッパ。

船に乗せてこれから西インド諸島に運ぶ人間を船上で完全管理するには頑丈な拘束具が必要だ。通常、海上で船長がもつとも恐れたのは黒人の反乱だった。彼らに装着する重い鉄の首かせと足かせが必要となる。「鉄」はヨーロッパの「強さ」の象徴だった。アフリカとの取引において貨幣の代わりに「鉄棒」がしばしば用いられた。⁽²⁰⁾

「鉄製の首かせ足かせ」、これがヨーロッパの優越を示していたというここでのコメントは、物語の展開上、後で別の意味をもってくる。作品の山場は奴隷にされてしまったタマンゴが船上で反乱を起こすところにあるのだが、その蜂起に当たってはタマンゴを含む奴隷全員に装着された「鉄製の首かせ足かせ」を切らなければならないわけで、実際にタマンゴの知恵で鉄製の拘束具は「切られる」ことになるからだ。

つまりヨーロッパ文明が優越を示すとメリメが言うところの鉄製の「くびき」は、見事にアフリカ人に「切られて」しまうのだ。「木」のアフリカ、「鉄」のヨーロッパ、と言って後者の優越を誇ったところで、アフリカは「鉄」すなわちヨーロッパを「切る」ことになる。鉄の「くびき」から自由になったアフリカ人たちは、その結果、船上の白人を皆殺しにするのだ。

タマンゴは後述するようなちよつとした「知恵」を使って、鉄の「くびき」を切ったのだが、鉄製の「くびき」がヨーロッパ文明の優越を示すというのなら、タマンゴの、つまりアフリカの「ちよつとした知恵」が、ヨーロッパ文明を「切った」――打倒した――ということにもなる。この反乱では実際に白人と黒人の、またヨーロッパとアフリカの逆転劇が起きた。

さて船長とタマンゴの取引はどうなったか。ここまでで船長が買った奴隷の数は百六十人。これで船は概ね満杯になるはずだ。⁽²¹⁾船上で奴隷たちは、足や首を鎖に繋がれ、毛髪を剃られ、衣服もほとんど身につけていない状態で、隙間なく船倉に詰め込まれることとなる。大西洋を渡る航海は、通例、三か月ほどかかる長旅であり、病死や自殺も避けられなかったが、輸送途上で死なれると目的地での販売数が減って損失となるから、時に強制的な娯楽（歌や踊り）をさせ穴倉から外に出して空気を吸わせた。『タマンゴ』にもこうした「リクリエーション」場面が描かれている。食べない奴隷がいると鞭打って食べさせ、最低限死なないようにし、生かす殺さずの扱いだった。ちなみに船長の収入は植民地に運び込んだ奴隷数に応じて支払われたとされるから、死なれると困るのだった。⁽²²⁾

ルドゥとタマンゴの取引では、百六十人を売り終えたタマンゴの手元に、あと三十人、売れ残りの奴隷がいた。これを何とか売りさばいてしまいたいタマンゴは、一人につきウィスキー一瓶との交換でいいから買い取ってほしいと頼み込んだ。その三十人の中から、船内であるべく場所を取らない「もつともすんなりした」奴隷を二〇人船長は選んだ。ついでに船内で場所を半分しか占めないことを思い出して、三人の子供を買い受けた。

だが船の収容能力には限界がある。ルドゥの船にはもうこれ以上積み込むのは無理だった。それを見てとったタマンゴは、残った七人の一人である女奴隷に銃を向けて、その場で撃ち殺した。今買い取られた三人の子供の母親だった。「売れ残り」は次の取引まで置いておく場所もないし、老人や女ばかりでは、どうせ先行き高値では売れない。

奴隸を「モノ」扱いするのは白人：というこれまでの白人批判が、この場面で疑問に付されることとなる。黒人にとっても奴隸は「モノ」なのか。

これは奴隸制度存続・正当化の根幹に関わる議論とも結びつくものであった。十八世紀半ば、ヴォルテールが普及させたとも言われるつぎのような言説は、フランス人広くはヨーロッパ人の奴隸制度正当化の一般的言説であった。「みずからの仲間を奴隸として売るほうが悪いのであって、それを買収するのはたとえ善いこととはいえないにしても、売る側に比べればその「悪」性の度合いはずっと少ない」（小川七八）という理屈である。そもそもアフリカ社会に存在していた奴隸制度にヨーロッパが参与したにすぎない、買うのは悪いかもしれないが、売る方がもっと悪いという考えのもとで奴隸制度が擁護されていたのだ。

後の章で見ると、売れ残ったという理由だけでタマンゴが奴隸を撃ち殺す場面は、黒人の残酷性を必要なまでに強調したとしてメリメ批判を招くことになる。アフリカ人自らがアフリカ黒人を虐待し殺している姿がここにあり、奴隸を「モノ」扱いするのは白人だけではないことの証拠にしようとするばできないわけではない。

ただ「そもそもアフリカに奴隸制度があった：ヨーロッパはそれに便乗したにすぎない」という主張が、鶏が先か卵が先かの堂々巡りの理論であることも事実だ。すべてにおいて優先と先導を当然としていたヨーロッパが、この問題に限り、アフリカ先導を持ち出したのは奇妙だし、ご都合主義にも思われる。

二百年という時を経て距離を置いて考えることができる今、ヨーロッパの主張すなわちアフリカですでに奴隸だった者を単に別の地——ヨーロッパの植民地——に移動させているにすぎないが実情と見合わないこと

が、立証されつつある。アフリカにおける奴隷の歴史と実情も最近ますます明らかにされてきている。アフリカに奴隷制度があったことは事実であっても、そこでの奴隷たちは国内奴隷であり、大西洋を渡る規模での労働力としての奴隷の大移動とは規模も性質も異なっていたことが明らかにされている。⁽²³⁾

メリメは現代の研究が証明したこうした事実の指摘を待つまでもなく、すでに彼の時代にあつて、奴隷制度正当化のために広く受容されていた黒人先導説に白人の身勝手さを見ていたように思われる。タマンゴの残虐を描きはしたが、この場面に限っても、「見よ、これがアフリカ人というものだ……彼らはそもそも残虐なのだ」というメッセージは伝わって来ない。タマンゴが商品として揃えた奴隷たちは、白人に売るための奴隷たちである。この場面では、むしろ白人に奴隷を売るタマンゴを通して、白人の奴隷観が透いて見える。これは白人に買ってもらうために仕入れた商品が、売り手がつかないので、「破棄」されたという場面である。

こう解釈したからといって、タマンゴの残虐さが正当化できるわけではない。ただ白人相手の奴隷商タマンゴが取った「売れ残り商品」の処理方法は、白人による合理的な商品管理と見合つたものではある。それに、殺したのは三人の子供の母親だ。子供らが船に乗せられて見知らぬ遠い地へと運ばれていけば、後に残された母親にはもう生きる希望というものはないに等しいのだ。三人の子供を母親から奪つた奴隷制度の側にも問題はあるのではないか……。議論はこうして、鶏が先か卵が先かに戻っていく。メリメがこの場面で問題提起しているのは、まさにこうした堂々巡りの議論の行き詰まりではないだろうか。

酔いがますますまわつたタマンゴ、さらにもう一人殺そうと彼は狙いを定めた。二人妻の一人エイシェが慌てて彼の腕を引っ張って止めに入った。この「妨害」に憤って、タマンゴは気が狂つたように妻を銃の台尻で

殴った挙句、船長のほうを向いて言い放った。「ほら、このあまっちょをくれてやるぜ」(三四三)。酔いのためとはいえ、このときの「提供」はタマンゴに大きな代償を払わせることになるだろう。

船長に異存はない。船はすでに満杯を超えているが、なんのことはない、彼女の居場所ぐらいなんとしてでもみつかるだろう。思わぬ追加品を頂いてしまった船長、あとは一刻も早く出港するに限る。「いつまでも川に残っていることは賢いやりかたではなかった」(三四三—四)。なにしろいつ姿を現すかもしれないイギリスの巡洋艦のことが心配だ。奴隷交易の廃止を決定していたヨーロッパで、海上権を握るイギリスが大西洋上を航行する奴隷船の検挙に躍起になっていた。⁽²⁴⁾

タマンゴが自分の失敗に気づいたのは、翌朝、酔いが覚めてからだ。慌てふためいて急遽カヌーを漕いで船を追いかけて、追いついたこと、船上で船長らに捕獲されて奴隷にされたことについては、すでに述べたとおりだ。

タマンゴはブランデーを飲んで狂暴になった：目が覚めたとき頭が朦朧としていた：と書かれているところを見ると、妻を手放す意志があったわけではないらしい。酔いが醒めて妻がいなくて驚愕し、白人船長に連れて行かれたと知って、「肝をつぶした」(三四四)。「自分で自分の頭をなぐった」(同)とも書かれている。

この当時、白人の奴隷商人は現地の「奴隷売り」との取引に当たって、相手をまず酔いつぶしてから交渉に入る者も少なからずいたと言われる。⁽²⁵⁾ 商談を有利にもっていくための一種の戦術だった。最後の叩き売りでタマンゴが奴隷一人とブドー酒一杯を交換条件にした場面からも、現地での酒の価値の高さが分かる。

さてもう少しタマンゴの後を追っておこう。彼は妻を取り返しに奴隷船を必死で追う。普通なら奴隷は奴隷

船から逃げようとするものだが、ここでは皮肉にも逆だ。奴隷は、通例、強制連行で奴隷船に乗せられるのだが、タマンゴは必死で奴隷船にすがりついていく。「飛んで火に入る夏の虫」さながらである。

だがこの状況はタマンゴの「自由」を照らし出している。妻を追跡できるのは彼が「自由」の身だからに他ならない。アフリカには妻や夫から引き裂かれて奴隷商人に渡された黒人が数多いはずだが、彼らのほとんどは、買い戻してくれる見受け人でもない限り、運命のなすがままだった。⁽²⁶⁾ 夫、妻、息子、娘、を追いかけることなどありえない相談なのだ。

早い話、いまルドウの船に乗せられてマルチニックに運ばれようとしている二百人近い奴隷たちも、妻や夫から引き離されて船倉に繋がれ、うずくまったままではなかったか。三人の子供もまた、先刻、母親から引き離されたのではなかったか。

奴隷たちにとって家族の離散は宿命だった。どんな場合も、泣いたり叫び声をあげたり自殺する以外、何もできはしなかった。⁽²⁷⁾ 実際に、新大陸への移送中に絶望のあまり大西洋に身を投げ、サメに食べられた奴隷の例も記録されている。こうした場合、監視係の水兵は奴隷一人分の損失につき罰として一カ月分の給料を返上させられたということだ。⁽²⁸⁾ 裸に近い姿で船倉に閉じ込められ、小さな不従順の気配の一つも見せるとただちに鞭打たれたが、死なれても困る存在だったことはすでに確認したとおりだ。

長い船旅を生き伸びて新天地に着けば、彼らは奴隷市場に出され、農園主に買い取られた。奴隷主の所有物に過ぎない彼らに移動の自由があるはずもなく、万一、別の農園に妻や夫や子供が送り込まれても、この作品のタマンゴのように追いかけることなどできるわけではない。それでもなお追いかければ、それは「逃亡」の罪

に該当しただろう。

タマンゴの呪文

植民地プランテーションでは農園主にとって、またアフリカでは現地奴隷商にとって、奴隷の「逃亡」は頭の痛い問題だった。アフリカ内で「集荷」された奴隷たちの場合、出身地近くに置いておくと馴染んだ土地へ戻ろうとして逃亡する例が多く、それを防ぐため極力、遠隔地や未知の土地に彼らを運んだということだ。

「アフリカの奴隷商人の算定する奴隷の価値は、その奴隷の生まれ故郷からの距離に比例している。奴隷たちは生まれ故郷から二、三日の旅程のところにいるときには、しばしば逃亡を企てる。しかし故郷との間にいくつもの国が介在するような場合には、逃亡は困難なので彼らは自分たちの状態に甘んじてしまう。そこで悪くすると、一人の商人から別の商人へと売られ、ついには故郷へ帰る望みをまったくなくしてしまう不幸な奴隷もいる。沿岸地方のヨーロッパ人に買われた奴隷は、おもにこの種の奴隷である。彼らのうちのある者は：海岸近くで起きた小ぜりあい逮捕えられたものであるが、大部分は、ヨーロッパ人たちが名前すら聞いたことのない内陸の国々から：連れてこられたものである」とマンゴ・パークはアフリカの奴隷について見聞を残した。⁽²⁹⁾

逃亡した奴隷がどれほどの厳罰に処されたか、自由を持たない奴隷とはどのような存在であったのか。これを知るための資料の一つが、植民地における奴隷に関する法律を定めた通称「黒人法」である。⁽³⁰⁾ この法律によ

る逃亡奴隷への罰は、一か月以上の場合、両耳を切り落とされ肩に焼き印を押される、再逃亡者は両脚膝裏の腱を切られ、もう一方の肩に焼き印が押される、三度の逃亡があると死刑に処される、という厳しいものだ⁽³¹⁾。た。(小川七一)。

奴隷が置かれたこうした状況を背景にタマンゴによる妻の追跡を考えてみよう。妻を取り戻すために帆船に追いつこうとカヌーを漕ぐタマンゴの姿から見えてくるのは、繰り返すことになるが、彼が自由の身だということだ。同じアフリカ黒人ながらタマンゴは失敗に気づくと、それを埋め合わせるために決然と奴隷船に向かう自由をもっていた。

ただし、タマンゴの自由は仇となった。間違つてではあったが妻を船長に「あげる」ことができた彼の自由、その妻を今度は追いかけることができた自由、これらがいずれも裏目に出て、彼を自由を持たない奴隷の身分におとし入れたのだった。

だが我々は問いたくもなる。自ら奴隷船に近づいて行つたとはいえ、追いついたタマンゴを捕獲し奴隷にする権利をいったい誰がもっていたというのか。組み伏せ、鎖で縛り、自由を奪う権利を誰がもっていたというのか。本来的に誰にもその権利はないというのが答だ。

取り押さえ鎖に繋いだのは、白人船長と部下だ。タマンゴを拘束したのは、タマンゴが黒人であり、奴隷制度のもとでは黒人が商品として売られていたからだ。先刻、タマンゴには自由があったように見えたが、彼は奴隷売買が存続する限り、白人によって商品として扱われるのだ。フランス人は自由のために戦い大革命まで起こしたが、その成果を今のところ黒人と共有するつもりはなかったということである⁽³²⁾。

ヨーロッパ人は概ねアフリカ人を自分たちより劣等とし、教化の対象と考えていた。圧力に屈しない頑強なアフリカ、すなわちキリスト教化し得ないアフリカ勢力はそこを植民地化しようとする際の大きな妨げとなった。⁽³³⁾ 帝国主義は西インド諸島や南米の植民地化の時同様、キリスト教化と文明化を二つの旗印にしていた。その中で土着のアニミズム信仰をもつアフリカ人たちは、キリスト教と文明の教化対象として見込める、すなわちヨーロッパ化しうる、対象であった。十九世紀後半、フランスからセネガルのニジェール川流域に派遣されたガリエニは、アニミスト集団の襲撃に遭い財産を失いながらも、彼ら土着の黒人のほうがイスラーム教徒よりもはるかに御しやすいと考えたという（竹沢七五）。

さて、当作品でタマンゴのアフリカ性は、このアニミストというかたちで発揮される。アニミズム的アフリカを描く二つの重要な場面があるので、それらを見てみよう。一つ目は妻エイシェを服従させる場面、二つ目は他の黒人奴隷を支配する場面であり、いずれも船上での出来事である。いずれの場合にもタマンゴは同胞アフリカ人のアニミズム信仰に訴え、それを使って自らが望む方向へと彼らを動かした。いずれの場合にもアフリカ黒人たちは、この土着信仰の完全な呪縛のもとでタマンゴに操られていく。

最初の例は妻エイシェが船中で白人船長にうやうやしく仕えているのを見た直後の場面である。「後甲板に腰をおろして、静かにパイプをふかして」いるルドゥ船長のかたわらに、妻は「鎖をつけずに控えていた」
（三四六）。

青い木綿のしゃれた服を着、足にはモロッコ革のかわいい上履きをはき、手にはいろいろな酒をのせた

盆をささげて、いつでもつぐ用意をしている。彼女が船長の側近にあつて高級な役目を果たしていることは明らかだった（三四六）。

すでに見たように、タマンゴはこの妻を船長に差し出してしまったのであるから、今、彼女が船長のそばに侍り、「高級な役目を果たして」いても文句は言えない立場にいる。彼は今、船上で鎖に繋がれた奴隷の身なのである。

いくら後悔したところで後の祭なのだが、事情はどうであれ、船長に仕える妻を見てタマンゴに衝撃が走った。彼は叫び声を上げてすさまじい勢いで立ち上がり、見張りの水夫たちがあわてて抱きとめる暇もなく、後甲板に向かって走り出した。

「エイシエ！」と、彼は雷の落ちるような声で怒鳴った。エイシエはキャツと叫んだ。「白んぼどもの国にママ＝ジャンボがいねえと思っているのか？」すでにして水夫らは棒を振り上げて駆けつけた。（三四六）。

タマンゴがここで妻にかけた呪文は、明らかに彼女を震え上がらせた。エイシエは泣き崩れた。タマンゴが発した「あやしい言葉」に胸をえぐられたのだ。

ママ＝ジャンボとは、「悪魔を地に滅入らせるような曲」（三四七）を流しながら、大きな白い人形を森の中

から飛び出させて、不貞の心配がある妻をアフリカ黒人の夫が脅す白い大きな化け物のことで、土着の迷信に基づく脅しの一種である。⁽³⁴⁾乗船している通訳が船長に説明するところによると、「なあに、黒んぼどものこしらえるおぼけですよ」、「からくりは一目でわかります。ところが黒んぼと来ちゃ、単純なもので、それがわからねえんですよ」(三四七)となる。

呪文をかけられたエイシェはというと、洪水のような涙を流している。この呪文に縛られた彼女は、翌日、タマンゴの姿を見ると彼のもとに走り寄り、彼の前にひざまずき、痛恨を込めた声で「許して、タマンゴ、許して!」と叫ぶのだった。

タマンゴはアフリカのアニミズム的風土から生まれた妄信を活用して妻の心を掴んだのだ。また物語の展開上、ここでエイシェがタマンゴの呪文に完全に屈してしまうことが必要であった。なぜなら呪文によってエイシェのアフリカ人魂を完全支配したうえで彼は、誰にも聞かれないよう注意して一言、「ヤスリ」と彼女に囁いたのだ。

一本の「ヤスリ」をビスケットのの中に焼き込んで、エイシェがタマンゴに投げてよこしたのは、それからしばらく経ってからである。「この道具こそ、反乱の成功いかんにかかっているものだった」(三四九)。この道具を使って徐々に奴隷たちは繋がれている鎖を解いていき、蜂起の準備が整うだろう。

もう一つの重要な場面でも、アフリカ人のアニミズム的発想が鍵となっている。同胞アフリカ人を奴隷として白人に売るのが商売で、自らは奴隷になるなど考えてもいなかったタマンゴが他の奴隷と一緒に鎖に繋がれている今、元の自由の身に戻れる方法は何か。答は反乱だった。また蜂起するには他の黒人奴隷の協力が必須

だった。だが自分が売った奴隷たちに今になって協力を求めるのはいかにも無理な話ではないか。

水夫たちに組み伏せられた時、「綱にかかった猪のようにもがく」(三四五) タマンゴを船長は縛りあげた。船長がその時発した言葉「みやがれ！ やつの売った黒んぼどもが、あべこべにやつが奴隷になったのを見て晴々して笑わあ。天の配剤がおあんなさるてえことが今度こそやつらにもわかつたろう」(三四五) は、一理ある発言だ。売られた身に見れば、タマンゴ自らが船に転がり込んで来て奴隷になったのだ。今、彼を助けることはないではないか。

どんな手段に訴えれば、こんな状況にあつてなお他の奴隷たちを動員できるのか。タマンゴが思いついたのは、やはり彼らのアニミズム信仰に訴えることだった。「魔術をかけて」彼らを主導していくことにしたのだ。タマンゴは脅迫も使った。「この企てを助けることを拒むものは悪魔の罰を受けるであろう」(三四九) と。そこへビスケットに焼きこまれた「ヤスリ」がタイミングよくエイシェから届いた。これで鎖を切ることができらう。

夜がやって来た時、彼は何かわけのわからない言葉をつぶやき始めた。のみならず、それに続いて奇妙な身振りをやりだした。次第に、熱中して来てついに叫び声さえあげた。刻々に変わる彼の声の抑揚を聞いていると、だれか目に見えない人物と興奮した会話を交えているとしか思えなかった。奴隷たちはことごとく震え上がった。今しも一座のまん中に悪魔が来ているのだということを彼らは疑わなかった(三四九)。

この方法を使ってタマンゴは他の奴隷たちを蜂起に巻き込むことに成功した。秘密兵器となる「ヤスリ」を隣にいる奴隷たちに触らせながら、彼は叫んだ。「仲間たち……どうとう許しが出たぞ。おれの祈り出した精霊が約束していたことを今、許してくれたのだ」(三五〇)。

こうしてアフリカ人のアニミズム的発想を利用して船の奴隷たちを結集した。カリスマ的なリーダーによる洗脳の一種だが、要するにアフリカ人アニミストらの心性の核心に触れたのである。彼らはタマンゴの言うがままになって、反乱に突入して行く。

タマンゴがアニミズムを使って反乱を指揮していくさまを見てきた。先述の「黒人法」は、一八四八年の奴隷制度廃止まで一五〇年以上にわたってフランスにおける奴隷に関する法的基盤だったが、この法律の序文に基本方針が述べられ、そこでは、西インド諸島における「ローマ・カトリック教会の規律を維持するため」にこの法律を制定する……とある(小川六五)。奴隷船でアフリカから運ばれてきた黒人たちは、植民地に到着するとすぐカトリック教徒となるべく洗礼を授けられ、キリスト教の宗教教育を与えられたという(小川六六)⁽³⁶⁾。植民地の労働力として機能的かつ従順に働かせるため、呪術的な土着信仰からまず完全に脱却させることから始まったのだ。⁽³⁶⁾ プランテーションの経営者は国家のバックアップのもと、キリスト教的価値観を使ってこうしたアニミズム的発想を持つ奴隷の支配に当たったのである。⁽³⁷⁾

タマンゴの困惑

ルドゥ船長の船「希望号」は、追いかけて来たタマンゴを奴隸にして足枷をはめた上で、追い風に乗って一路、西インド諸島に向かった。武器を取り上げられて拘束されたときに激しく抵抗して負った傷が徐々に癒えてくると、タマンゴはようやく甲板に姿を現した。そこで目にしたのは、すでに見たように、妻エイシェが船長の傍らに甲斐甲斐しく侍っている姿だった。

タマンゴが反乱を目論み始めたのは、この瞬間からである。最大の問題だった、他の奴隸たちの協力も、前章で見たように魔術を使って煽動に成功した。奴隸たちは彼に協力し、一丸となって暴動へと突入した。血が血を洗う、船上での壮烈な戦いとなり、白人は全員殺された。

こうして船を奪取したタマンゴだが、はたと彼は困惑する。船の操縦の仕方が分からないのだ。笑うに笑えない事態であった。船長を殺し、乗組員を殺し、戦闘に勝ち、自由の身となったが、故郷に帰ろうにも航海のすべを知らないのだ。彼に協力して船を奪取した同郷の仲間たちに、これだけは、面子にかけて、決して知られてはならないと固く心に誓うタマンゴであった。

優秀な「戦士」であったタマンゴに、思わぬ「ほころび」があったのだ。この場面に使われている、航海術を知らず船をあやつれない黒人像とは、当時のヨーロッパ人がもっていた「野蛮で無知な人々」という偏見に合致するものだった。⁽³⁹⁾メリメはこうしたかたちで黒人の「無知」を世の中の目に晒したかどで、最近の有力な

研究の一つで差別主義者に分類されているが、これについては最終章で検討することになる。

この章では、タマンゴが弱り果てる様子を本文に沿って見てみよう。暴動の終盤で、最後の白人の死体がずたずたに切り刻まれ、海に投げ込まれると、反乱に成功した黒人たちは「復讐に飽満して、空を仰ぎ、船の帆をながめた」(三五二)。そのとき彼らに一抹の不安がよぎる。帆は強い風をはらんでおり、自分らは勝利したというのに、再び「隷属の地へ」と運んで行くかに見えたからだ。操縦者がいない船は、停滞しているか、風に流されているかの状態だったのだ。「なんにもならなかったのか！ 白人どものこのどえらい崇拜物はおれたちを国に返してくれるだろうか。こいつの主人たちの血を流したこのおれたちを？」(三五二)。黒人たちの恐怖心はふくれあがった。

故郷アフリカに戻ることを信じて反乱に協力したのだ。成功したが、いったい本当に自分たちは故郷に帰れるのか。心細い思いで彼らが帆を見上げていた時、誰かが言った。「タマンゴならこれを意のままに従わせることができるだろう」(三五二)と。

すぐに一同は大声でタマンゴを呼んだ。だがタマンゴはなかなか姿を見せない。船尾の部屋に放心したようにこもっていたのだ。さすがに彼は参っていた。自分に対して無能を認めたくはなかったし、なにより不安や狼狽を決して気づかれなかった。それにこの段階ではまだ、おそらく何とかなる…と考えようとしていた。とは言うものの…

勝利の喜びも一抹の暗影を彼の心から消し去ることはできなかった。それはすべての彼のものごしに包

み切れず現れていた。他の連中よりは幾分か無知ではなかったので、自分の位置の困難さを彼はよく知っていたのである（三五二）。

だがこのまま閉じ籠もり続けるわけにもいかない。タマンゴは心にもない平静を装いながら、ついに皆の前に姿を見せた。寄つて来た黒人たちが船の操縦を彼に迫った。

いかに愚昧なりとはいえ、この船中にあつて、何か車輪のようなものとその正面に置いてある箱とが、船の運動に影響を及ぼしていることに気のつかなかった黒人は一人もいなかった。が、このからくりのなかには、彼らにとっては依然として大いなる神秘がひそんでいた。タマンゴは長いこと、くちびるを動かしながらコンパスを検べていた。いかにもそこに書いてある記号を読んでいるかのように。それから、彼は手を額の所に持つて行つて、暗算でもしているような考え込んだ様子をした（三五二）。

自信はないものの、大勢の黒人たちの手前、ここで下手なことをしでかしてはならない、何とかならないものか、と操縦室で必死に知ったかぶりをするタマンゴの必死の思いが伝わってくる。

タマンゴに虚しい希望を託しつつ、故郷に帰るには彼の腕にすぎると観念している黒人たち。この場面は、蜂起に同意して彼とともに船内暴動に参加したアフリカ黒人が、今、故郷への帰還を一刻も早く実現したいがために、タマンゴにさつさと操縦桿を握つてほしいと願っている場面である。彼らが動乱に協力した

動機は単純明快だ、それを果たした暁に彼らが故郷に帰ることを要求するのは理にかなっている、とメリメが念を押しているのがこの場面だ。

読者としてはここで、反乱を思いついたときのタマンゴは自分の操縦能力の欠落を分かっていたのか、という点が気になるところだ。同乗の奴隷たちを立ち上げさせるためにタマンゴが魔術を使ったのをすでに前章で見たが、ここでは彼の説得のしかたから、この点を追ってみよう。

（タマンゴは）白人の数の少ないことを述べ、番人の油断が日ごとに増していく点を指摘した。それから、はつきりとあかしは立てずに、彼らを故郷へ再び連れて行くことができると言い放った。……演説に当たって、彼はプール人の方言のみを用いた。それは大部分の奴隷たちには聞き分けられたが、通訳にはわからないものだった。演説者の名声と、奴隷が従来彼を恐れ、彼に服従する習慣をもっていたことは、いみじくも彼の雄弁に力を添えた（三四九）。

この引用では、「はつきりとあかしは立てずに」彼らを故郷へ再び連れて行くことができると言い放った、とある。ここから、タマンゴ自身、この時すでに船の操縦術の欠落について自覚していたとも取れる。そうであれば、暴動の先に何があるか知つてのうえで、先行きに確信をもたないまま、無謀にも、また無責任にも、奴隷たちを反乱に巻き込んだことになる。

だがそうとも言い切れない事情もある。この「煽動」演説の段階では、実行の鍵でありもつとも重要な小道

具の「ヤスリ」を彼はまだ獲得していなかったからだ。演説のこの時点で「ヤスリ」の入手はまだだったから、反乱の実行に確信がもてなかったという解釈が、ここから可能になる。タマンゴが「陰謀の一味に向かって、言葉を濁しながら、時期はまだまだ到来していないし、夢に彼のところへ現れた悪魔もまだそのことを彼に予告していないが、最初の合図があったらすぐ立てるようにして置く必要がある」（三四九）という場面もある。時期が到来していないがゆえに、「はつきりとあかしを立てないで」話したのであるかもしれない。

船の操縦不能ゆえに反乱が最後は失敗に終るといふ、本作品に設置された根本的なアイロニーからして、タマンゴが自分の不能を反乱前に知っていたのかどうなのかを確定したいところだ。彼は失敗に終わることを覚悟のうえで反乱を起こしたのか、それともそこまで考えないで、ともかくも反乱に突入したのか。前者なら他人を巻き込むことを覚悟の決死の反乱だし、後者なら彼の軽薄が強調され、肝心かなめのところで「間抜け」ぶりを露呈した男として、道化の役どころに近くなる。

困り果てて、最後の手段としてタマンゴは、小舟なら風向き次第でうまく練れるかと、奴隷たちを分乗させた方がいいが、波に吞まれて彼ら全員を死なせてしまった。白人も皆死んだが、黒人も結局、タマンゴ以外は皆死んだのだ。彼自身は生き残るが、故郷のアフリカには帰れず、自らが奴隷を送り込んでいた西インド諸島の島で死ぬことになる。

ある意味、タマンゴは自分の数奇な体験を語るために、つまりこの小説を成立させるためにも、生き残らなければならなかった。イギリス船に救助されて英領ジャマイカのキングストンに着くと、「ひとびとは彼に身の上話を求めた。彼は知っているだけのことを話した」（三五七）。

タマンゴの最期

これまでの分析に続いて、この最終章で避けて通れないのが奴隷制度に対するメリメの姿勢である。『タマンゴ』の作者は奴隷制度反対派か、奴隷制度賛成派か、解釈上、意見が分かれるところだからだ。

『タマンゴ』に奴隷制度肯定の姿勢は認められないというのが本稿の結論であることを、まず述べておく。これまでの章で、この点についていくぶんかは明らかにできたかと思うが、メリメが用いる複雑で屈折した視点の操作が、彼の真意を把握しにくくしていることが一因で、評価に分裂が生じている。⁽⁴⁰⁾

時代の制約を考慮に入れるなら、奴隷制度への関心が高まっていたとはいえ、この当時、ストレートに反対の姿勢を打ち出すことができる環境はまだ整っていなかった。『タマンゴ』批評において奴隷制度に関して反対派・賛成派と評価が異なる背景には、この問題について社会自体が微妙に揺れていたこと、個人においても明快な態度を打ち出すことは賢明ではなかったこと、といった状況を理解しておく必要もある。

国家経済を植民地経営に大きく依存し、そこでの労働力の確保に長らく貢献してきた奴隷交易・奴隷制度であれば、これを正面切って否定するのは、時代の趨勢が徐々に確実に変化していたとはいえ、この作品発表時においてはまだ慎重を要することだったのだ。当時最大の奴隷制反対論者コンドルセが偽名を使って論文を発表している事実を知るとも、この辺の事情の説明に役立つだろう（小川一〇三）。

『タマンゴ』を奴隷制度支持派の作品に分類するもつとも最近の論客がクリストファー・L・ミラーだ。⁽⁴¹⁾ 彼

の主張に耳を傾けてみよう。

『タマンゴ』を詳細に分析して彼はこの結論に至っているが、要点をまとめると以下の二つになる。一、これは主人公の反乱計画の挫折を描くことよってアフリカ人の劣性を描く人種差別的な作品である。二、アフリカ黑人タマンゴの無知と無謀は黒人蔑視から来るもので、それは作者が人種差別と偏見を持っていた証拠であり、このことからメリメは奴隷制度支持者に分類される…。

メリメには当時の奴隷制度反対論者を積極的に妨害する意志があつたとすらミラーは考えている。登場人物タマンゴにおける航海術の欠落をはじめとしてアフリカ黒人の愚劣を『タマンゴ』で晒しものにしたというのだ。またこれを作者の白人優越主義の証左としている。メリメのタマンゴへの視線には悪意に近いものがあるとミラーは言う。

白人のルドゥ船長に関して、いくつかの皮肉なコメントをメリメがしていることを認めてはいるものの、それと比較にならないほどの軽蔑の視線が黒人タマンゴに注がれているとミラーは言う。例えばタマンゴによる「売れ残った奴隷」の殺害場面、ここからもメリメが現地奴隷商ひいては黒人をいかに冷血漢に仕立てあげたかったかが伺えると言う。

タマンゴの外観描写にもミラーはメリメの人種差別的な視線を見ている。すでに本稿で紹介した場面だが、ルドゥが彼の藁小屋を初めて訪ねた時のタマンゴの服装についての描写にメリメの蔑視が見られると言う。タマンゴが白人の古着を着ていたこと、それも着用の仕方すら知らないで、だらしなく「黒い肌」が覗いていたという描写は、ヨーロッパ人の真似をして古着をぎこちなく着るアフリカ人を見下している証拠と主張する。

ミラーはメリメが描くアフリカ黒人の愚かさは、アフリカ全体の愚かさのプロパガンダであるとすら主張し、黒人のこうした描き方は、当時のフランスにおける奴隷制度廃止の動きに逆行するばかりでなく、廃止運動が挙げようとしていた成果を壊すものだったと結論づけた。

ミラーのメリメ批判について、いくつかの問題点を指摘したい。一つには、ミラーが『タマンゴ』を小説として理解しようとしていないこと、むしろ奴隷問題に関わるパンフレット類と同列に扱っていること。「文学がアイロニーを扱うのを批判するわけではないが」(二一〇)とミラーは言うが、ここにこそ奇しくもミラーの問題があるように思われる。というのもミラーはメリメのアイロニーを認めていないからである。

ミラーの主張すなわち『タマンゴ』の黒人蔑視は当時の奴隷廃止論者もっていた好意的な黒人観に水を差すもので黒人否定そのものだとする考えは、メリメのアイロニーを無視しない限り、ありえない発言に思われる。見る角度を変えると無限に色彩が変わる万華鏡のような小説世界をメリメは創り出したが、その世界はアイロニーの微妙なズレによってさらに色彩を変え奥行きを増していくものである。

そういうわけであるからメリメの小説を刻々変化するアイロニーとそのズレから生まれる色彩の変化を追うことなしに読むなら、作品の厚みを本当には楽しめないし、またそうした読みかたでは、万華鏡として覗くべき世界を虫めがねで覗くような格好になってしまう。

『タマンゴ』の黒人観は当時の奴隷廃止論者の黒人観を逆撫でするとミラーは断言する。なぜなら「奴隷制度廃止論者の黒人観」は「高貴な黒人」に表現される黒人賛美に立っていたからだという。黒人賛美の黒人観の発端となった文学作品『オルノーコ』をミラーは例に挙げ、この作品をメリメの対極すなわち奴隷制度反対

の陣営に位置づけている。『タマンゴ』は黒人蔑視によって、『オルノーコ』が培った黒人賛美の文学伝統を壊したというのがミラーの主張である。

『タマンゴ』のように黒人の「愚劣」が描かれると黒人が否定され、それはすなわち奴隷制度維持思想であり、反対に『オルノーコ』のように黒人の美点が描かれると黒人が肯定され、奴隷制度反対思想だという図式がミラーの議論から見えてくるが、ことはそれほど単純ではない。ミラーはメリメの時代における二つのキャンペは少なくともそうだったと言いたいのもかもしれないが、当時の読者をそこまで一括りにしてしまうのは荒々しく思われる。

メリメの黒人観・奴隷制度観を、ミラーのように、タマンゴという黒人の描かれかたのみから抽出することは、先述の例えを再度持ち出すと、万華鏡として見るように構想された世界を一個の虫めがねで見るといえるのだ。メリメの黒人観・奴隷制度観を作品からどう汲み取っていくかは、万華鏡を覗く読者がそこで展開するさまざまな色彩と光の反射が最終的に結んでいく像に見ていくべきもので、タマンゴの劣性が描かれているかないかを虫めがねで見て判断するものではないだろう。

確かに当作品でタマンゴはヨーロッパ人がもっていた黒人に対する偏見のいくつかを具現しているが、これを作者が黒人に対して持つ偏見そのものと受け取ってしまうのは要するに早計に過ぎるのである。作者というのは世の中に流布する偏見をいかようにも——つまり否定的にも肯定的にも——自由自在に取り込むことができるのであって、この「取り込み」が最終的にどこに向かうのが問われるべきことなのはここで言うまでもない。

黒人の長所を描けば奴隷制度反対論者で黒人の弱点を描けば奴隷制度賛成論者とするミラー的な図式化は文学作品に関するかぎり尺度として不足することをごまかで指摘してきた。ミラーが『タマンゴ』と対比させて奴隷制度反対作品に分類する『オルノーコ』とは、それではどのような作品なのか。⁽⁴²⁾

『オルノーコ』の黒人主人公は、なるほどあらゆる面で優秀である。だがそれをもって作者の黒人観を肯定的とし、ひいてはこの作品を奴隷制度反対論に分類できるのかどうか。

ヨーロッパ文学の中で初期の奴隷小説と言われる『オルノーコ』(一六八八年)、これはアフリカ黒人の奴隷売りが奴隷にされて新大陸へと送られるという小説で、主人公の運命という点で『タマンゴ』と共通点がある。⁽⁴³⁾ この作品を書いたのは女性作家アフラ・ベイン(一六四〇—一六八九)で原作は英語だが、一七四五年にドウ・ラ・ブラッスによってフランス語に翻訳され、メリメの国でも広く読まれた。

『オルノーコ』の黒人主人公が周囲を圧倒せずにはおかぬ数々の美徳を備えたアフリカ黒人であるのは、ミラーが着目するとおりだ。彼は勇敢な戦士であるばかりでなく、礼儀作法を完璧に身につけ、美貌にも恵まれるという「驚異的な黒人」である。オルノーコはまた、英語、フランス語、スペイン語を話し、「人間的な教養」に富み、「偉大なる魂」の持ち主である。彼はアフリカの王家に生まれた「王子」でもあり、作品の副題『やんごとなき身の奴隷』が彼の出自を語っている。

オルノーコのような黒人像はアフリカを「汚れなき野蛮の地」とし、未知・未開を理想化する、のちにルソーが説くような自然観へと受け継がれていくと考えられる。オルノーコを優秀な黒人として登場させているこの作品、果たして黒人を高く評価していると言えるのか。

無論、『オルノーコ』が優秀な黒人主人公を登場させている事実から、黒人に対する作者の好意を読み取るのは一向に差し支えない。ただ、例外的な、白人を上回るほどの突出した黒人を描いて、絵空事のような理想像を作りだしているところがあり、これはこれで作者のアフリカおよびアフリカ人への単なる夢想という印象を与える。ベインのような極端な理想化・美化は、現実味が返って乏しく、黒人賛美そのものもそれに見合っ

て空虚になることも実際に否めないのだ。

もつとも問題視するべきは、おそらくつぎの点だ。『オルノーコ』の作者はこの黒人に全面的にヨーロッパ的基準を当てはめて賞賛しているということ、即ち彼の頭脳の良さを英語、スペイン語、フランス語などヨーロッパ語を操ることやヨーロッパ的教養の習得で証明し、礼儀作法の良さがヨーロッパの宮廷作法の規範に則っているとして賞賛されている点である。

端的に『オルノーコ』の作者のヨーロッパ優越思想が現れているのが主人公オルノーコに授与される別名である。送り込まれた植民地では、白人が彼を「シーザー」と名づけるのだ。オルノーコは嬉々としてこの名前を受け入れる。ヨーロッパ的帝国主義の祖型となった古代ローマ帝国の連想、そしてヨーロッパ的英雄の典型的な名前を「優秀な黒人」にダブらせている。『オルノーコ』の作者に黒人への真の意味での敬意があったと考えるのは、こうした点から困難に思われる。

タマンゴは、なるほど理想的な主人公オルノーコの対極にいる。ここでもう一つ留意したいのは、『オルノーコ』が書かれた十七世紀後半と『タマンゴ』が書かれた十九世紀前半という時代の隔たりである。この間、ヨーロッパにおける黒人観が同じものとして常にとどまっていたわけではない。ベインの時代はメリメの時代

との比較で言うと、アフリカとアフリカ人に関する情報は未だ比較的少なく、それだけに未知なるアフリカに「夢」と「希望」をヨーロッパ人が託しうる状態だった。アフリカを「無垢なる」地としてまだ理想を投影できる時代だった。これが『オルノーコ』における黒人主人公理想化の背景である。

メリメの時代にはアフリカ観・黒人観は大いに違ってきていた。まだアフリカ探検は期待したほどには進んでいなかったとはいえ、宣教師、官吏、商人、旅行家などからベインの時代に比べれば格段の差で情報は入ってきていた。アフリカやアフリカ人について、単純な理想化や美化が成り立つ時代ではもうなくなっていた。

一七〇〇年ごろから徐々にヨーロッパ人のアフリカ人観は、キリスト教の宣教成果の行き詰まりなども一因として、肯定から否定に変わっていった。ミラーが図式化したような、ベインは黒人肯定、メリメは黒人否定という分類は、こうした諸状況に鑑みて、必ずしも妥当ではない。

『オルノーコ』と『タマンゴ』を比較検討してきた。この二つの作品で主人公が対極にいるというのは疑いのない事実である。完璧なヨーロッパ的紳士であるオルノーコ、そして対称的な「ダメ男」タマンゴ。オルノーコと違ってタマンゴはつぎつぎと弱点を露呈していった。彼の人生が失敗と困惑の連続であったことは見てきた通りである。

繰り返すまでもないが、酔っぱらって妻を差し出すし、乗っ取った船は操縦できないし、当初はオルノーコ同様「勇士」として紹介されたのだが、読者の期待は裏切られようであった。つまりタマンゴは、ドジを踏みどおしのアンチ・ヒーローなのである。

オルノーコの完全無欠がその他大勢の一般的黒人を返って愚かに見せたとすれば、欠点だらけのタマンゴは

まさにその逆現象を生み出した。タマンゴが露呈する愚かさがその他大勢のアフリカ黒人たちを、その愚かさの犠牲者として、際立たせずにはおかぬからだ。ミラーのメリメ批判ではタマンゴの劣性がアフリカ黒人全体を愚弄したということだが、愚かなアフリカ人が登場すればそれだけでアフリカ全体が嘲笑されるとする読者は、愚かな子供が登場する小説を読んで「子供がバカにされた」と憤慨する読者に似ている。

メリメの場合、ヨーロッパの偏見を小説のキャラクターに敢えて具現させ、読者にその偏見の意味するところを問い直す機会にするという、いわば小説を読者との問答の場とするような手法が取られている。現に存在する偏見を避けて通るのでなく、前面に出すことは、ちょうど『タマンゴ』の場合のように、誤解を生む危険が大いにあるのだが、この危険を冒して読者の前に偏見を曝け出し、読者を偏見と向かい合わせたのだ。

タマンゴの最期を見届けて、この章を閉じよう。マストのない一隻の船が漂流するのをイギリスの巡洋艦がみつけることで、絶体絶命かに思われたタマンゴは、奇跡的に救出された。

船内に「一人の黒人の女の屍骸」と「ミイラかと思うほどに肉の落ちた、やせこけた一人の黒人」(三五七)が発見された。エイシェの遺骸と、かろうじて生き残っていたタマンゴである。意識はなかったが呼吸はしていたという。軍医の介抱で、やがてジャマイカのキングストンに着いたときには、彼は「完全に健康を回復していた」(三五七)。

キングストンでタマンゴは総督府に雇われた。彼を見た連隊長は自分の連隊の軍楽隊で「サンバル」を叩かせることにした。運命は巡り巡って、タマンゴを楽師にしたのだ。このお役目、「勇士」タマンゴにとっての最後の困惑だったのではないだろうか。その後、彼は肺炎を患って死んだ。

「ダメ男」を描きはしたが、タマンゴの最期をみとるメリメの視線に不思議と冷たさは感じられない。

結び

「黒人も人間ですからね」とある時点でメリメはルドゥ船長に言わしめている。黒人を「モノ」扱いしていることがあまりに明白な奴隷取引人の口はこの台詞を吐かせる。これがメリメの典型的な手法である。当時のフランス社会の奴隷制度下でこれといった矛盾を感じないで日常生活を送っている「読者諸兄」の中に、決まり文句として「黒人も人間ですからね」と軽く口にしたことがある人がいたら――おそらく少しはいただろう――、その人にはこの場面がずしりと響いたかもしれない。

「黒人も人間ですからね」と言ったルドゥが奴隷制度反対論者ではなく奴隷制度で一儲けも二儲けもしていることを確認するだけで、ミラー的な『タマンゴ』解釈が表面的理解で終わっていることが分かる。

白人船長は奴隷制度に便乗して不法な儲けを得ようとし、黒人のタマンゴは同胞のアフリカ黒人を売って儲けた。この二人は船中で殺し合うはめになり、タマンゴはルドゥを殺して白人対黒人の死闘には勝つが、この勝利が今度は、あるミスによって、乗組員全員の破滅を招く。

当作品のアイロニーのひとつは、同胞の自由を奪ったタマンゴが、自らの自由を奪われた点にある。だが彼は、その他の黒人奴隷のように、黙って耐えることはなかった。奴隷の身分に落ちると、ただちに自由を挽回するために蜂起したのだ。

だがタマンゴの自由への戦いは、矛盾に満ちたものであり、またすべてが裏目にでる結果となった。蜂起に協力すればアフリカに連れ戻してもらえると夢見ていた、奴隷船の黒人奴隷たちは、タマンゴのミスのために大西洋の波に吞まれた。同胞を奴隷として売り渡し、彼らの自由を奪っただけで済まず、この奴隷たちを、今度は大西洋上で死なせてしまった。こんなことなら黒人奴隷たちは、タマンゴの反乱に賛同せず、植民地で奴隷主の鞭や焼きごてに耐えていたほうがまだマシだったのか…。

だが故郷から遠く離れた新天地の農園で「モノ」と化して管理され搾取されて、果たして何がマシだろうか。騙されて大西洋上で波に吞まれるのと、植民地で奴隷主から死ぬほど鞭打たれるのと、どちらかがベターであるはずもないだろう。

『タマンゴ』から亡霊のように立ち上がるのは、波間に消えた名もない二百人近い奴隷たちの姿だ。彼らはアフリカの内陸部から、しばしば戦争捕虜として、また借金肩代わりに、駆り立てられて鎖に繋がれ、重い荷物を頭に載せて連行され、白人に売られた者たちだ。白人の手に渡るまでに多くはキャラバン隊に入れられて砂漠地帯を連行されたが、その道中、餓死する者や弱って死ぬ者を見捨てて来た。

沿岸部の奴隷交易所に着くと、そこで白人の船の入港を待たされ、船が着くと品定めされ——頑強な黒人から売れていった。買い取られると船に乗せられ、船倉では鎖に繋がれて裸同然で大西洋を渡った。

新大陸に着くと、農園主に買い取られた。しばしば起こったという大西洋上での難破で、植民地まで行きつかないこともあったが、この小説では難破でなくタマンゴと一緒に蜂起して奴隷船が漂流、こうしたら助かると言われて小舟に乗り分けたところ、波が彼らを吞みこんだ。

メリメが追跡したのは確かにタマンゴの運命である。だが読者はタマンゴの運命を辿りながら、彼の犠牲となった名もない大勢の黒人奴隷が彼の後ろに貼りついているのを払いのけることができない。作品から立ち現れる名もない者たちが読者の心に引き起こす哀惜と怒りとは、自由を剝奪し人間を殺している奴隷制度への強い不当感から来るものである。影のようにタマンゴに寄り添った彼らこそ、『タマンゴ』の本当の主人公たちだった。

奴隷問題とは究極のところ、人間における自由の問題である。この本質論に立ったメリメは、自由の剝奪が意味するところをタマンゴと彼の背後に貼りついた黒人たちの運命を通して描いて見せた。海に消えた犠牲者たちが読者の胸に焼きついて離れないのは、メリメ自身もっていた自由についての気概ゆえだった。

当時の奴隷制度反対文書やパンフレット類は過去の産物となったかもしれない。専門家の研究のために所蔵庫から時折取り出される資料に化したかもしれない。だが今でも、『タマンゴ』は読まれているし、「自由」という人間にとっての永遠の課題について、もうわれわれは語らなくてよいという時が来るまで、読まれ続けるだろう。

注

- (1) アフリカ黒人は植民地に着いてプランテーションに買い取られてから身分的に「奴隷」となり、輸送のこの段階ではまだ「奴隷」ではなく「捕虜」である。厳密な意味ではこうした二種の用語の区別は必要であるが、本稿では捕虜（戦争などの捕虜との混淆が生じる可能性あり）の段階の奴隷予備軍も、ひとまず「奴隷」と呼ぶこととする。小川了『奴隷商人ソニエ』 山川出版社 二〇〇二年 一一八頁以降参照。今後の

引用で「小川」とし括弧内にページ数を付す。

- (2) 一六二五年以前から西インド諸島でのフランスによるアフリカ黒人の奴隷使用は始まっていたが、農園における労働力供給源として十七世紀末から本格化した。William B. Cohen, *The French Encounter with Africans* (Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 2003), 88. 今後の引用でCohenとし括弧内に頁数を付す。

- (3) 「自由と人権を原則として高らかに謳った、あのフランス大革命も、実際の奴隷制廃止へと直結することはなかった。植民地支配そのものは革命の理念と矛盾するとは考えられていなかった。平野千果子『フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院 二〇〇二年 六一頁。今後の引用で「平野」とし括弧内に頁数を付す。

- (4) 一七八三年から大革命中の九二年までの十年間に三七万人の奴隷が一〇〇隻の貿易船で運ばれた。奴隷貿易がもっとも拡大したこの時期に奴隷制反対運動も台頭してくる。(小川九六)。

- (5) フランス革命と奴隷制との関係については平野に詳しい。

- (6) 一九四〇年にこの作品は『奴隷一揆』という邦題で和訳されたことがあるということだ。成沢理平編注 Prosper Mérimée, *Tamango* (Librairie Daigakusyoin, 1962) 序文参照。この和訳を入手することができず、したがって目を通すことができなかった。

- (7) この時代に奴隷問題を作品の主題とした作家にヴィクトル・ユゴーやシャルル・ド・レミューザがおり、いずれも本作品と同じ一八二〇年代の発表。

- (8) ウィーン会議でヨーロッパにおける奴隷交易は原則廃止されたが、フランスの場合、マルチニック他の西インド諸島植民地の挽回により奴隷労働力を再度必要としていた。会議五年後の一八一九年においてもなおフランスの港から五六隻の奴隷船が出港、会議後の十年間に四七二隻の「奴隷船」らしい船がアフリカへ向かった。一八二〇—二六年间が不法輸送の最盛期だった。Christopher L. Miller, *The French Atlantic Triangle* (Durham & London: Duke University Press, 2008), 198. 『タマンゴ』がタイムリーなテーマを扱っていることが分かる。今後の引用でMillerとし括弧内に頁数を付す。

- (9) 当時、フランスからアフリカまでの航海はほぼ一カ月近くを要した。

- (10) どの船も一人でも多くの奴隷を積み込むため最大限の空間利用をした。本作品でも一人でも多く積むため船長は船を改造したことが特記されている。中甲板を利用して低い天井の空間を作り羽目板を背に奴隷たちを向き合せて並べた。通常、足と足の間は巡回者が通るため空けられていたが、船長はこの空間もつぶして、そこにさらに奴隷を直角に寝かせる工夫をした。穴倉の不衛生や空気の悪さが原因で死亡する奴隷もいたため、交易廃止運動は奴隷船における黒人の扱いに加えて船内の不適切な環境を問題視した。ガリマール版の注五九五―六頁参照。
- (11) テクストは Prosper Mérimée, *Tanango, Romans et Nouvelles* (Éditions Gallimard, 1951)。引用は杉捷夫の名訳『メリメ全集』第一巻 河出書房新社 三三九―五七頁) を使わせてもらい本文中の括弧内に頁数を付す。
- (12) アフリカ社会の内部に奴隷がいたことは知られているが、ヨーロッパの需要にに応じて売却目的の奴隷捕獲が行われた。「十八世紀、アフリカでの戦乱は諸王国がその領土を拡大するためになされたのではなく、まさに人を捕らえ、それをヨーロッパ人に売るためになされたのである」(小川八八)。
- (13) 「奴隷の供給源として最大のものは戦いの場、戦争である…他集団を襲撃し、人々を捕らえ、奴隷にする」(小川二四八)。フランス人が直接内陸部へ奴隷の買い取りに行った場合にも決して「武装を怠らないこと」、また現地で雇い入れた水夫にも「各自に銃一丁と剣」を与えておくこと、と助言がなされた(小川一八二)。
- (14) 「船長ルドゥは熟練の船乗りだった」の一文が作品の冒頭。退役して年金暮らしとなったのちに高度な航海理論を研究し私掠船の船長となったという経歴の持ち主。
- (15) ヨーロッパ人がアフリカ人と取引をする際、贈り物は慣習というより必須要件だった。これによってのみ取引が進んだ (Cohen 22)。
- (16) 小川七三。
- (17) 『タマンゴ』発表当時はフランスの植民地主義が新大陸中心からアフリカへと方向を変える移行期であり、アフリカとの関係をそれまでの奴隷購入から徐々に内陸部の資源へと移していた。
- (18) 平野はフランスにおける海外領土をめぐる歴史をフランス革命期(奴隷制の一時廃止)、革命末期のナポレオン期(奴隷制復活とエジプト遠征)、アルジェリア侵攻期(北アフリカへの進出)の三期に分けている。『タマンゴ』発表はこの分類の第三期突入期だった。この期を平野はフ

ランスの植民地政策における「新規まき直し」期（六七頁）と位置付けている。

- (19) スコットランド人探検家マンゴ・パークが十八世紀末に書いた西アフリカ探検記に類似のエピソードが認められる。ポンドウ国の王に接見した際、パークが着ていたヨーロッパの上着とくに黄色いボタンを王が気に入り、入手したいと懇願されて上着を献上したと述べている。アフリカ人がヨーロッパ人の服装に非常な興味をもっていたことが伺える。メリメが何らかのヒントをパークから得た可能性が考えられる。なおタマングの服装を描写するこの場面は再度、最終章で検討する。マンゴ・パーク著 森本哲郎・廣瀬裕子訳『ニジエール探検行』河出書房新社 一九七八年 六八頁。今後の引用で『ニジエール』とし括弧内に頁数を付す。

- (20) ヨーロッパとの交換物のうちアフリカに好まれたのが鉄だった。武器や農耕具に使われ、貨幣代わりともなった（『ニジエール』四五）。貨幣代わりの鉄棒は一本五リヴルと換算された。奥地での奴隷買い取りに鉄棒七〇本が支払われた例がある（小川一五〇）。

- (21) 百六十人収容の奴隷船は大西洋を渡る船として当時、中型船以下だった。多くて六〇〇人以上、平均三―四〇〇人収容の船も少なくなかった。

- (22) 船長が船の所有者でない場合も多く、船主（通常は大商人）との雇用契約のもとで船を指揮した。船長の収入は輸送する奴隷の数に比例しく積み込むほど多く支払われた。

- (23) Cohen 40. アフリカ社会内における奴隷身分について地域によって大きな差があった点はこうした考察において留意する必要がある。西アフリカに（こゝではMartin Klein, *Slavery and Colonial Rule in French West Africa* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998) 参照。今後の引用でKleinとし括弧内に頁数を付す。

- (24) ヨーロッパにおける奴隷制度廃止への動きは通例二つのステップを踏んだ。まず交易廃止から着手し、もっとも困難な部分である制度そのものの廃止を交易廃止による自然消滅に委ねようとした。奴隷問題の解決におけるこうした二段構えの対処法は、全廃までの道のりを返って引き延ばし、制度廃止議論を複雑化する結果となる⁸。Lawrence C. Jennings, *French Anti-Slavery: The Movement for the Abolition of Slavery in France 1802-1848* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000) 参照。

- (25) 小川によれば奴隷商人ソニエも、現地人との取引において「相手にたっぷり飲ませてから」商談に入るべきこと、酒の力を借りないと商談がまとまらない、とした（小川一七〇）。

- (26) 奴隸所有者が奴隸を売る場合、結婚している奴隸を子供がなければ妻から引き離して売ることも構わないと考えられていた（小川二三八）。
- (27) 捕獲されて売られて行く奴隸の中には将来を悲観し絶望から自殺する者もいた（小川一九三）。
- (28) Emma S. Christopher, *Slave Ship Sailors and Their Captive Cargoes, 1730-1807* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), 42.
- (29) 『ニジェール』二七〇。
- (30) 奴隸の身分とその使役に関する具体的な法律を定める通称「黒人法」が発布されたのは絶対王政期ルイ十四世によるもので一六八五年。
- (31) 白人が奴隸を殺した場合も同じこの法律で罰せられたが、刑はいたって軽く罰金程度だった。一六七〇年、マルチニクで白人の中尉が妻に暴行を加え奴隸の手足を切断した場合の罰は降格で済んだが、他方、ロバを殺した奴隸は手足切断のうえ絞首刑にされた（Cohen 57）。
- (32) フランスにとって植民地化は長らく「善」であり、人道主義と植民地化は矛盾しなかった（平野八一）。植民地支配が批判されるようになったのは十九世紀末から二十世紀初頭にかけてにすぎない（同）。
- (33) 竹沢尚一郎『表象の植民地帝国』世界思想社 二〇〇一年 七四頁。今後の引用で「竹沢」とし括弧に頁数を付す。
- (34) 『ニジェール』（五五）に「マンボ・ジャンボ」というアフリカの風習に関する記述がある。家族内のいさかいの仲裁役として夜、仮装をして皆の前に現れ気味の悪い大声をあげる民間「裁判官」のことと描写され、彼が「犯罪者」の名を呼ぶと呼ばれた者は服を脱がされて満座の嘲りの中で鞭打たれたと記されている。メリメは『タマンゴ』を書くに当たり当時もっともホットなアフリカ探検記であった『ニジェール』を読んでいると呼び方を少し変えて作品に導入したと想定される。ガリマール版の注五九七頁参照。G. Hainsworth, "West-African Local Colour in *Tamango*", *French Studies*, vol. 21, 1967, 16-23 もバークの当該箇所と『タマンゴ』のこの場面を比較している。
- (35) 奴隸制度正当化の最大の理論はアフリカ黒人を彼らの置かれた「不幸」から救出してキリスト教徒として魂の救済を得させるといったものだった（小川七六―八一）。
- (36) キリスト教徒は原則的に奴隷にはしない、アフリカ黒人の魂の救済のためにキリスト教徒に改宗させる、という建前だったが、改宗させても自由を与えたわけではなかった（Cohen 45）。
- (37) アフリカにいたまま改宗すると仲間に鞭打たれたりして被害を受ける：西インド諸島に送り込むのがむしろ彼らの魂救済に必要な……という理

由づけてルイ十三世は奴隷制度を弁護したとされる (Cohen 19)。また「邪教徒」であるアフリカ人をキリスト教に改宗させるために彼らを奴隷にしなければならない……という本末転倒の論理も流通した。

- (38) 一八一九年、フランスから出港した奴隷船の二隻の実名が「希望号」だった。その内の一隻はナント港から出港している (Miller 199)。実在した奴隷船の名前が使われたのである。この船名に皮肉が込められていることは指摘するまでもない。

- (39) 「航海術を知らないアフリカ人」というモチーフは必ずしもメリメの独創ではなく、例えばダニエル・デフォーの『シングルトン船長の冒険』などにも物語の展開は異なるがこれに近いモチーフが見られる。

- (40) メリメの作品がしばしば二重のメッセージを含むこと、意図が隠されているか、もしくは意図が表面上、不明であること、しばしばメッセージが曖昧であること、は多くの批評家が指摘してきたところである。この問題を当時のフランスにおける政治的な状況の中で考察した研究に Scott D. Carpenter, “Of False Napoleons, and Other Political Prostheses: Writing Oppositionally from the Second Empire,” *Nineteenth-Century Studies*, vol. 25, 1997, 302-19 がある。

- (41) Miller 右掲書、注 (8)。

- (42) Roger Little, “*Oroonoko* and *Tamango*: A Parallel Episode,” *French Studies*, vol. 46 (1992), 26-32 は『オルノーコ』と『タマンゴ』を比較検討する論文だが、主眼が前者と後者の類似点に置かれている。いずれの作品も白人船長が主人公を「騙す」点に特に類似点があると主張するが、『タマンゴ』での話の運びを白人船長が単に「騙す」という解釈には同意できない。

- (43) Aphra Behn, *Oroonoko in Shorter Novels*, ed. Philip Henderson (London: Dent, 1967). 邦訳にアフラ・ベイン著 土井治訳『オルノーコ』岩波書店 一九八八年がある。作者の姓は文学史などでは「ベーン」と表記されることもあるが、本稿では土井の表記に従った。